

ひょうごの福祉

つながりで笑顔輝く 共生のまちづくり

特集
オール兵庫で進める
ほっとかへんネット
ワーカーの取り組み

笑顔輝く 共生のまちづくり
あなたのまちの福祉活動
キラリ ★ 社会福祉法人
セルフヘルプグループのリアル
私の物語
県社協TOPICS

古くからお茶の産地として
知られる母子地区では、
美しい茶畑一面の
風景を楽しむことができます
(三田市)

手軽に読める
「ひょうごの福祉」
WEBサイト



ふくさん

ひょうた
兵太くん

ふくみ
福美ちゃん

2025
5-6
No.859



この機関紙は赤い羽根共同募金
配分金により発行しています。

オール兵庫で進める ほっとかへんネット ワーカーの取り組み

兵庫県社協では、生活福祉資金コロナ特例貸付の借受世帯へのフォローアップ支援として、令和5年度より「社協における生活困窮者支援体制強化事業」（ほっとかへんネットワーカー配置事業）に取り組んでいます。県内の全市区町社協に配置された「ほっとかへんネットワーカー」は、厳しい生活を強いられている特例貸付利用世帯からの相談対応、生活状況の実態把握、行政や社会福祉施設・事業所、地域住民などと連携した支援体制づくりを各地で進めています。

今号では、生活困窮世帯の課題に対応する活動事例を紹介し、今後の展望をまとめます。

写真上から

「ほっとかへんネットたいし」との協働で実施した食料支援（太子町）
大学生や高校生の協力を得て開催した、子どもたちへの学習支援（神河町）
ほっとかへんネットワーカーの活動について協議する活動推進委員会
日ごろの取り組みについて、ほっとかへんネットワーカーが
情報共有・意見交換をする実践交流・情報交換会



県内全市区町に配置された ほっとかへんネットワーカー

令和2年3月より2年半にわたり取り組んだコロナ特例貸付。令和5年1月から償還が始まったものの、コロナ禍とその後の物価高騰で打撃を受けた経済情勢の回復は道半ばで、貸付を利用した世帯など生活困窮世帯が安定して暮らせる基盤を築くことは依然として難しい状況です。

県社協では、困窮状態が続く特例貸付利用世帯などが安心して暮らせるよう、必要な支援と地域のセーフティネットの充実を通じた社会的孤立・排除の解消と予防を目的に、県内全ての市区町村協に「ほっとかへんネットワーカー」を配置し、さまざまな取り組みを進めています。

ほっとかへんネット ワーカーの役割

ほっとかへんネットワーカーは、県内各地で次のような役割を担っています。

1 特例貸付利用世帯への相談支援

特例貸付を利用した世帯への相談支援を進めます。貸付を利用した後も収入の減少や失業などで困窮し、生活の維持が困難になった場合などには、負担を軽減するために償還免

除・猶予などの各種手続きを支援します。

2 孤立・複合多問題をネットワークで 支え合う体制づくり

複合的な問題を抱えるなど生活に困窮する一人一人により良い支援をするため、行政やほっとかへんネット（社会福祉法人連絡協議会）などの関連機関などとのネットワークを構築します。個別ケースや地域の社会資源に関する情報を共有する仕組みをつくるなど、ほっとかへんネットワーカーは多機関連携での支援を進めます。

3 当事者がつながりを実感できる取り組み・資源の創出

関係機関との会議、アンケート調査などによって特例貸付を利用した世帯や地域住民の困りごとを把握します。また、地域にある住民活動・居場所などの社会資源の情報を収集し、さらに既存の制度や社会資源で対応できないニーズに対しては、あらたな資源の開発を行います。

ほっとかへんネットワーカーが「相談支援」や「地域づくり」で役割を果たす



図1 地域力アップにつなげる仕組み

ためにも、その基盤にある「社協の体制づくり」が重要です【図1参照】。そのため各社協では、職員一人一人のアセスメント力の向上を図るだけでなく、組織的な対応が図られるよう部局間連携を推進して社協の総合力を発揮できる組織づくりを目指しています。

県内各社協での取り組み

各市区町村協は、借受世帯の相談支援や情報提供を行う「基本事業」に加え、地域の実情にあわせた創意工夫ある「選択事業」に取り組んでいます。主な取り組みと成果を紹介します。

1 生活課題の実態把握

多くの社協では、電話、郵送、Webフォームなどを組み合わせ、特例貸付利用世帯を含めた生活困窮者の実態調査をしています。調査で把握した課題は、行政や関係機関と共有して支援の充実につなげています。

2 関係機関と連携した地域生活課題への対応

状況に応じて、弁護士やファイナンシャルプランナーなどの専門職などと連携し、相談会などを通じて相談者のアセスメントや自立に向けた支援を行っています。

また、民生委員・児童委員と連携し、地域で暮らす生活困窮世帯との関係づくりを進め、社会的孤立を生まない地域づくり、多機関連

携による生活困窮支援に取り組んでいます。

3 当事者の参加の場づくり

生活課題を抱える当事者自身が持つ力を生かした活動や参加の場をつくる取り組みも各地で進んでいます。

例えば、特例貸付を利用した世帯に実施したアンケート調査の結果から、ボランティア活動に関心のある人にボランティアセンターへの登録を呼び掛け実際の活動につなげたり、特例貸付を利用した飲食店の経営者が講師役となった料理教室を開催した例などがあります。生活に困窮した当事者が主体的に活動し、参加できる場づくりを進めることは、困窮者支援に対する地域の理解を広げるきっかけにもなります。

4 就労支援・中間就労の促進

就労支援の取り組みの一例として、ほっとかへんネットと協働し、一般就労に結び付きにくい人への福祉現場の見学会や就労体験の実施があります。また、本人の希望に沿った就労に向けてハローワークへの同行支援も行い、これらの取り組みを経て、実際に正社員として就職した人もいます。

ここからは、ほっとかへんネットワークが配置された社協での活動事例を紹介します。

事例1 特例貸付返済に関する相談会の実施（神戸市中央区社協）

貸付利用世帯への償還猶予・免除に関する

手続きの支援と併せ、令和6年9月、区社協では債務に関する弁護士相談や就労の相談支援をワンストップで提供する相談会を実施しました。相談会に先立ち、貸付利用世帯のうち償還中や滞納中の約2,700世帯にチラシを送付。このチラシは、相談しやすい内容のため「やわらかい雰囲気」「わかりやすい内容」を意識して作成しました。

相談会で一番多かったのは、多重債務に関する相談でした。これを相談を受けると同時に弁護士会につなぐなど、ワンストップで開催した効果で適切な支援が提供できました。今後は、相談会で寄せられた相談内容を整理・分析し、今後の支援の充実につなげます。



相談内容に応じて、関係機関と連携した対応を図りました

事例2 生活困窮者支援 ネットワーク会議の開催（相模市社協）

特例貸付の利用世帯からの相談について、市社協では、経済的な困窮のみならず就労・就労に関する相談も含め、複合的課題を抱えた相談が多いと感じていました。この状態を脱却するには関係機関の連携による支援が必要だと、令和5年度に生活困窮者支援ネットワーク会議を始めました。

この会議では、行政、水道企業団、民生委員、対象者の家族などが一堂に会し、困りごとを抱える世帯に関する情報共有や課題の整理、支援方法を各々の視点から考え、実際の支援につなげます。会議で協議する件数も年々増えていますが、会議を通して関係機関同士の顔が見え、日頃から相談し合える関係も築かれてきており、今後も一人一人に合った支援が図れるものと期待されています。



関係者が集まり、複合的な課題を抱えた世帯への支援を共に考えました

事例3 中間就労・就労のきっかけづくり（丹波市社協）

特例貸付の利用世帯から市社協に多く寄せられていたのは、ひきこもりや疾病などの課題を抱え、本人や家族が思うように就労できないという相談でした。市社協は就労のきっかけとなる活動を進めることになり、ひきこもり・生活困窮などの問題に直面した当事者（特例貸付利用者含む）を対象に、草刈りの補助、フードドライブの仕分け作業、資料封入、イベント準備などをしてもらうことにしました。これらの作業について、特例貸付の利用世帯に直接的に周知するのではなく、生活困窮・

ひきこもりなどの当事者を把握している支援団体を通じて呼び掛けました。

就労のきっかけになればと始めたこの取り組みに、令和5年度は約30名、6年度は約40名が参加。「簡単な仕事でも外に出て誰かに喜ばれてうれしい」「作業を通じて自信を取り戻せた」という声もあり、この場を経て就労につながった人もいます。支援団体や市社協には、参加者からの仕事や作業を依頼してほしいという前向きな声も届くようになっていきます。



フードドライブの仕分け作業を通して、就労のきっかけづくりとしました

事例4 「お金に関する講座」の実施

(高砂市社協)

貸付利用世帯への実態把握調査から、市社協では、慢性的に生活が不安定な世帯が、特に子育て世帯に多いことを把握しました。また、窓口での相談でもお金の使い方に問題がある世帯が見受けられ、「親子に向けたお金に関する講座」の開催を決めました。

初年度の令和6年は、小学校高学年の子どもがいる親子を対象に講座を企画し、一般公募と併せて貸付利用世帯に個別に案内を送付。参加する子どもたちは、ゲームや疑似体験によってお金の大切さを学び、保護者は、将来

子どもに必要な経費(学費など)を学ぶ内容としました。

子どもの頃からお金の大切さと正しい金銭教育に触れることは、将来、社会で生きる力を育み、世代を超えた貧困スパイラルを防ぐために必要な取り組みと言えます。



将来も見据え、子どもの頃からお金の大切さに触れる機会を提供しました

ほっとかへんネットワークの活動を充実させるために

コロナ禍では、食料品などの寄付も多く寄せられるなど、生活困窮への関心が高まりました。その一方で、困窮状態に陥ったことを自己責任や他人事として捉える人もいます。特別貸付の利用者には、コロナ禍に直面するまで不自由もなく暮らしていた人も多くいるため、生活に困窮している実態が見えづらく、理解されづらい面があります。そのため、何かのきっかけで生活に困窮することは、誰にでも生じ得る「我が事」だということを、地域に理解してもらうことが大切です。「自らSOSを発信できない人がいるかもしれない」「孤立して必要な情報や支援が届いていないかもしれない」という意識が、地域に少しでも

広がれば、生活困窮世帯への気づきやアプローチが生まれ、ひいては誰も取り残されない支援体制づくりにつながります。

また、生活困窮者への支援は、行政や関係機関・団体と課題を共有し、協働で取り組むことが重要です。社協に寄せられる相談の現状や支援上の課題を積極的に情報共有し、福祉分野だけでなく、商工・教育・労働などの分野とも横断的に連携して対応することも求められます。

これらも念頭に県社協では、昨年度、学識者や県行政、市町社協職員で構成する「活動推進委員会」を設置しました。ほっとかへんネットワークの活動の充実と強化を図るため、困窮者支援について考える「実践交流・情報交換会」の開催、各地の取り組みを紹介する「ほっとかへんネットワーク活動事例集」の作成なども進めました。

ほっとかへんネットワークの活動を発展させ、特別貸付を利用した世帯を含む生活困窮世帯が地域で安心して暮らせるよう、また、社会的孤立の解消や予防につなげられるよう、関係者と共に取り組みを進めていきます。

今年3月に発行した「活動事例集」は、県内社協をはじめ福祉関係者に送付しています。今回紹介した事例も含めて、県内各地の多彩な活動を掲載しています





笑顔輝く

“笑顔”と“共生のまちづくり”につながる取り組みをレポート

共生のまちづくり

認知症の方の気持ちを穏やかにするといわれる「認知症マフ」。みっきいマフの会では、手編みのマフを病院や介護施設へ届ける活動を進めています。



「認知症マフ」を通して目指す、 認知症の人に優しいまちづくり



認知症の人が心安らかに
過ごせるように

マフとは、両端の開いた円筒状に編まれたニットの防寒具です。これに触れたり手を通したりすることで、認知症の人の気持ちを穏やかにする効果があるとされ、認知症マフは発祥のイギリスで「Twiddle Muff」と呼ばれています。

現在代表を務める森田さんが「みっきいマフの会」を立ち上げたのは、令和5年、認知症の当事者や家族、専門職がオンラインで交流する認知症サロンに参加したことがきっかけでした。ケアマネジャーとして働く傍ら、自分が暮らす地域のために何かをしたいと考えていたところ、ここで認知症マフの存在と効果を知りました。認知症高齢者と日常的に関わる仕事だったことから、マフ作りによって認知症に関心を持つ人が集まり、交流も生まれると思い、友人や仕事で知り合った看護師などに声を掛けて活動を始めました。

一人一人の暮らしや
歴史に寄り添ったマフ作り

病院や介護施設などからの依頼に応じて、マフの会では20名の会員が一つ一つマフを手作りして無償で届けています。マフを使う人が好きなものや昔の職業などを病院や介護施設を通じてヒアリングし、それを飾りやデザインに取り入れ、目で見て、触れて楽しめるマフに仕上げます。「生活歴からこれまでの暮らしを想像し、気持ちと和らぐよう心を込めて手作りにしています」と会員の皆さんは口をそろえます。

会員は「ゆるく楽しく」を合言葉に、毎月第3土曜日に集まり、おしゃべりしながらマフ作りを楽しんでいます。福祉専門職だけでなく、趣味の編み物を生かしたいと集まる会員もいますが、全ての会員に共通するのは、認知症の方、一人一人に寄り添いたいという思いです。



おしゃべりもしながらのマフ作り。会員にとっては情報交換の場にもなっています

使う人の暮らしや希望を踏まえ、飾りなどがオーダーメイドであしらわれています

使い方を伝えるだけでなく、私たちの活動によって認知症の方への理解が地域に広がれば」と森田さんは語ります。マフの会では、認知症をテーマにした出前講座や手作り小物の即売会なども開催し、認知症の啓発活動に力を入れています。「認知症になっても安心して暮らせる地域に」というマフの会が描く理想は、一つ一つの認知症マフを届け、また活動の幅を広げる中で、一歩ずつ実現に近づいています。

取材を終えて

実際にマフに手を入れると、気持ちが落ち着くように感じられました。そして、手作りの温かみこそが、使う人にさらなる安心感をもたらしているように感じました

みっきいマフの会

団体代表者：森田 由三子さん
活動場所：三木市末広1丁目6-46
三木市立市民活動センター

※定期的な活動は、毎月第3土曜日の午後に行っています。
活動への参加を希望する方は
代表の森田さんの携帯電話（090-1136-1450）まで

あなたのまちの 福祉活動

共生のまちづくりに
向けて市町社協が
関わるさまざまな
福祉活動を紹介します。



この活動を紹介してくれたのは

淡路市社会福祉協議会

☎0799-62-5214

淡路市社協

検索



それぞれの思いを込めて 地域一丸となって作るアイスクャンディー

地元のアイスクャンディー屋「ICE-UP」と社協が運営する「ゆうゆうライフデイサービスセンター」によって商品化した赤しそレモンキャンディー。誕生の過程や携わった人たちの思いを紹介します。

■ きっかけはデイサービス利用者の一言から

赤しそレモンキャンディー誕生のきっかけとなったのは、赤しそ作りの名人と呼ばれるデイサービスの利用者Aさんの「畑で作った赤しそなんやけど…」というつぶやきでした。これを受けて、デイサービスセンターで赤しそジュースを作ることになりました。8月に赤しそを収穫し、葉や茎に取り分け、茹でることでジュースへと変わります。収穫から加工までの2日間の作業には、デイサービスの利用者や職員、夏休み中の小学生も参加して行われました。

ジュースづくりを終え、さらにAさんの赤しそを生かせたら考えていたところ、地域活動に理解があり、地元素材でアイスをつくる「ICE-UP」店主の多田健造さんとの出会いがあり、一緒にアイスクャンディーを開発することになりました。原料となる赤しそシロップの開発には、多田さんとデイサービスの職員・利用者が知恵を出し合い改良を重ね、令和5年の夏にアイスクャンディーの販売が始まりました。



ジュースづくりは
多世代の
交流にもなります

■ 作り手・買い手を超えて地域に広がる笑顔

赤しそレモンキャンディーは老若男女問わず地域で大人気となり、販売後、すぐに完売となりました。

「ジュース作りで終わりやと思っていた。まさかアイスクャンディーになると思わなかった」と驚くAさん。丹精込めて作った赤しそを多くの人に味わってもらえることへの嬉しさをにじませます。

さらにこのアイスクャンディーの売り上げの一部は、赤い羽根共同募金に寄付されます。多田さんは「販売するときは、開発の過程やエピソード、共同募金の意味をお客さんに伝えることを大事にしています」と語ります。

住民の思いを地域につなぐ社協と、地域の魅力を発信するICE-UPの強みを重ね合わせて、地域一丸となったアイスクャンディーが完成しました。また、開発に携わった人々や購入者を笑顔にして、その売り上げが地域づくりに役立てられる循環も生まれています。赤しそレモンキャンディーは地域の人をつなげ、これからも地域に笑顔をお届けしていくことでしょう。



アイスの原料になる
赤しそシロップは、
デイサービスの利用者が
店舗に届けます



ICE-UPの
Instagramは
こちら

キラリ★社会福祉法人

神戸市兵庫区社会福祉法人等連絡協議会 (ほっとかへんネット兵庫)



相談会には、
高齢者や生活困窮者、
子育て中の親など
さまざまな人が訪れます

多職種のチームで進める「福祉なんでも相談会」

ほっとかへんネット兵庫では、社会福祉法人の職員が自ら手を挙げて参加する「プロジェクト型」の取り組みを進めています。今月は相談プロジェクトチームによる「福祉なんでも相談会」を紹介します。

相談会のきっかけと 運営の工夫

ほっとかへんネット兵庫では、立ち上げ当初から、制度の狭間にある住民の困りごとに応えるため、「福祉なんでも相談会」（以下、相談会）を開催してきました。初めは地域の祭りやイベントに合わせ、年に1〜3回開催していましたが、相談者は少なく、まずは相談会を知ってもらうことが課題でした。

そんな中、コロナ禍で相談会の実施自体が難しくなったため、令和3年に相談会のあり方を検討するプロジェクトチームを発足。試行錯誤を重ね、相談会と食品の配布を組み合わせるスタイルが定着しました。今ではほっとかへんネット加入施設が交代で会場を提供し、区内各地で相談会を実施しています。

「ごはんを炊いてみよう」の 実施

食料支援と相談会を一体的に実施することで相談者は増加しました。子育て中の親からの相談も増え、日々の生活の苦しさや子育ての悩みなどから、児童館の預かりサ-

ビスにつながった例もあり、相談会は具体的な支援につながる入口になっています。相談によっては対応に悩むこともありましたが、多職種がチームで対応することで、職員同士が相互に学ぶ機会になっています。

相談から見えた課題に対応するため、プロジェクトチームでは活動の幅を広げています。その一つが、昨年11月に開いた「ごはんを炊いてみよう」というイベントです。食料品を配るだけでなく、簡単な調理を通じてみんなで食べる喜びを共有しながら、生活スキルを身につけてもらうことがねらいです。



「集まって食事をするのが楽しかった」という声が
きかれた講習会「ごはんを炊いてみよう」

そのほか、相談プロジェクトチームでは、困窮者支援や子育て支援に取り組む他団体が実施する相談会に月1回出向いています。そこでは福祉に関する相談に応じ、他団体と連携して地域の多様なニーズを把握しようとしています。

つながりのない人を 「ほっとかへん」ために

相談会は、徐々に地域に定着してきましたが、まだ支援につながっていない人もいます。このため、相談会のことを広く知ってもらうための広報や地域の中に気軽に立ち寄って相談できる場を増やすことに、当面、力を入れていこうとしています。

ほっとかへんネット兵庫では、社会福祉法人だけでなく、多様な団体と区を超えた連携を進めて支援の輪を広げようとしています。つながりのない人をつくらないために、地域全体で支え合う取り組みへの機運が高まっています。

ほっとかへんネット兵庫
事務局・兵庫区社会福祉協議会
TEL 078-5111-2111

部活動では、ママたちが
好きなことやりたいことを
楽しんでいます

県内に拠点を置いて活動する自助グループを紹介します

セルフヘルプグループの

リアル



転勤族ママ&キッズ探検隊 in 西宮

「転勤族ママ&キッズ探検隊 in 西宮」は、転勤などで西宮市に転居してきた子育て世帯のママや子どもたちのグループです。その活動について、代表の松村さんに伺いました。

団体の概要

名 称 転勤族ママ&キッズ探検隊 in 西宮
連 絡 先 tennmamaandkids@yahoo.co.jp
活動日など 毎月第3木曜日
(会場は西宮市内の公共施設など)



▲
ブログはこちら



初めての参加でも、みんなとすぐに仲良くなれる
「おしゃべりお遊び会」

Q1. グループを立ち上げた きっかけは

A. 平成22年に夫の転勤にあわせて、愛知県から西宮にやってきました。はじめて住む街で、心細く感じたこともあり、2歳の子どもと子育てサロンに参加していました。しかし、子どもを連れて公園に行っても溶け込みづらさを感じるなど、慣れない土地での子育てに不安があり、私と同じ思いの人がいるはずとSNSで発信すると、15組の親子とつながることができました。

その人たちと集会所を借り、転勤で西宮にきたママ同士の交流をスタートさせました。情報交換はもちろんお互いに悩みを話したり、子どもたち同士も仲良く遊べる、居場所として活動を続けています。

Q2. 現在はどのような活動に 力を入れていますか

A. 子育ての情報交換を行う定例会「おしゃべりお遊び会」と、メンバー自らが好きなことをする「部活動」です。部活動では、ハンドベルの演奏、近くの海・街へのお出掛けなどの企画を通じてみんなで楽しんでいます。忙しいママは、イベントに参加するだけでも大歓迎です。

現在は、地元のNPO法人が発行する子育て情報誌「にしのみや子育てマガジン^{とも}tomoni」の制作に参画するなど、グループの枠を超えた活動も続けています。

Q3. 社会に望むことやグループの目標は

A. グループができたころは、夫の転勤についていくことで、自分の仕事の継続をあきらめる時代でした。近年はリモートワークも普及し、必ずしも仕事を続けられないわけではありません。

しかし、知らない土地での子育てに不安を抱くことに変わりはなく、私たちが転勤してきたママたちと地域の懸け橋となれたらと考えています。そのためにも、私たちだけで活動するのではなく、市役所や西宮で活動するいろいろな団体とつながり、交流できるプラットフォームになる必要性を感じています。今後の活動として、私たちと同じように遠方から西宮に来た留学生や大学生などとも、緩やかでも温かみのある交流ができたと思います。

私の物語

このコーナーでは、地域福祉のキーパーソンや実践者・当事者らのエピソード・思いを紹介していきます。

私のモットー

今、少しずつできる歩みを進めたい

障害を越えて、皆で寄り添い、支え合える社会を目指して

か や さ と し
彼谷 哲志 さん（三田市）

三田市障害者総合相談窓口さいてネット
精神障害者支援センター 主任相談支援専門員



Personal History

平成14年 抑うつ状態となり、精神科受診。会社を休職
平成22年 仲間と共に自助グループを立ち上げる
平成24年 特定非営利活動法人あすなろに就職
平成29年 三田市障害者総合相談窓口さいてネットの相談支援専門員となる

仲間と共に支え合った経験を礎に

会社員として働いていた時にメンタルを崩し、復職や転職、入院などを重ねました。特に、入院中は心の支えである家族や友人、社会から切り離され、強い孤独感がありました。退院後も、人と話すことが辛くひきこもりになりましたが、主治医に紹介された「居場所」に通い始め、仲間や職員の方と少しずつ話せるようになり、目の前が広がる思いでした。

支え合うことの大切さを実感し、社協や地域の支援者に相談して仲間と共に自助グループをつくりました。派遣の仕事をしながら自助グループの活動が続けるとい、二足の草鞋にしんどさも感じましたが、それでも「自分の経験を精神保健福祉の分野で生かしたい」という思いが消えず、今の法人に相談員として就職しました。

当事者性を生かした相談支援

当事者の気持ちが想像しやすいからこそ、私の場合、入院はできるだけ勧めたくないですし、正論

で問いたただくことは避けるなど、相談者の気持ちに寄り添いながら支援したいと思っています。

時には相談に来た方とお互いの経験や悩みを話し合い、支援者という立場を超えて支え合うこともありました。相談者に自己開示をしすぎたことで、病氣・障害と付き合いながら生きることによる不安を抱かせてしまうといった失敗も経験しました。以降は何を話すか、話さないかを見極めて支援をしています。

支援者としての活動を経た今、社会に対して当事者の思いや理想をそのまま伝えるのではなく、その思いに気づいてもらうにはどうすれば良いかを考えるようになりました。当事者と支援者の橋渡しを担っているように感じていて、難しさもありますが、それが面白いところだとも思います。支援者であり、当事者でもあるからこそ、客観的な視点を持つことが大切だと感じています。

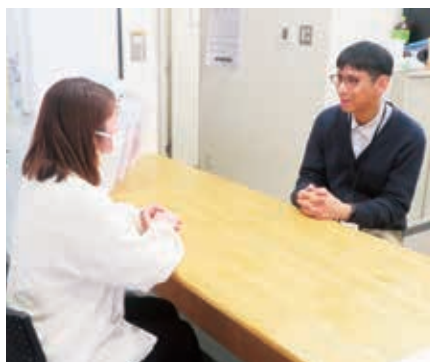
障害の有無にかかわらず安心して暮らせる社会に

入院してもすぐに家族や友人に会える環境や、当事者同士で語り

合える場所が全国にあればという思いを持ち続けており、私自身、働きながらピアサポート※に関する研修講師をしたり、書籍を執筆したりと当事者仲間のための活動に携わっています。「障害があっても楽しく」というより、普通の人と同じように苦しんだり楽しんだりしながら過ごせる社会になっ

※ピアサポート (Peer Support)

…同じような悩みを持つ仲間 (peer) 同士が支え合う活動



相談窓口は、当事者が素直な気持ちを伝えられる場所の一つ



執筆者として参加した書籍の一つ「ピアスタッフとして働くヒント」(星和書店)

令和7年度の県社協の
重点的な取り組み

社会福祉を取り巻く情勢を踏まえ、県社協では令和7年度の事業を計画しました。以下、5つの重点的な取り組みを紹介します。

1「県社協2030年計画（仮称）」
の策定

現行の「県社協2025年計画」が令和7年度末で推進期間を終えるため、あらたに多様な主体と協働して「県社協2030年計画（仮称）」を策定し、組織基盤の強化と地域福祉の推進を図ります。

2ほっとかへんネットの全県的な
取組強化

社会的孤立や生活困窮などの課題解決に向け、市町村の包括的な支援体制づくりを進め、社協や社会福祉法人、多様な主体の協働による「ほっとかへんネット」の活動強化を図ります。

3福祉・介護人材の確保・育成・
定着に向けた全県的な取組の
強化

福祉人材の確保に向けて、福祉

の魅力発信、若者との学びの場づくりを進めます。また、福祉・介護の専門職の研修を強化し、併せて外国人介護人材の受入促進や定着を支援します。

4市町村での生活支援・権利擁護
支援の仕組みづくり

生活福祉資金・コロナ特例貸付の借受世帯などへの生活支援を進め、「ほっとかへんネットワーカー」を中心とした社協の生活困窮者支援体制を強化します。また、日常生活自立支援事業などを通じた市町村での権利擁護支援の仕組みづくりを進めます。

5大規模災害に備えた全県的な
福祉・ボランティア活動支援の
取組強化

福祉・介護現場での災害支援体制づくりとして、市区町村のほっとかへんネットの活動を生かしたDWAAT（災害派遣福祉チーム）の組成・活動支援を行います。また、市町村協や災害支援を行う団体・NPOと連携した県域のプラットフォームづくりを進めます。

事業計画の全編は、県社協のホームページに掲載していますのでご覧ください。



福祉体験学習で福祉の
職場の雰囲気を感じよう

福祉人材センターでは、福祉のお仕事に興味・関心がある方に対して、施設・事業所での仕事を見学・体験できる「福祉の職場体験事業」を行っています。

体験可能な施設・事業所は県内450か所を超えており、お住まいの近くで職場体験をすることも可能です。受入施設や申込方法は福祉人材センターのホームページで確認ください。

また、この3月にリニューアルした福祉人材センターのホームページには、職場体験事業以外にも、就職説明会や職場見学バスツアーなどのイベントの

令和7年度
福祉の
職場体験
無料

実際に福祉の職場を体験して、
雰囲気を感じてみませんか？

福祉体験学習事業のご案内

実施期間 令和7年 4月1日～3月15日まで ※期間中は年度でも体験可能

対象者 福祉の仕事に興味・関心のある方や、就職希望の方（高校生以上）
※対象にならない場合もありますので、詳しくはパンフレット裏面をご覧ください。

費用 無料 ※ただし、体験先までの交通費等は原則、自己負担となります。

日程 1つの受入施設・事業所につき、
1日4時間以上8時間以下の体験で
計5日以内

ひょうご・福祉のおしごと探し総合支援サイト

あなた色の未来探し、
福祉のシゴト始めよう

職場体験の詳細はこちら
ホームページはこちら

予定を順次掲載していきますので、併せてご利用ください。

県民ボランティア活動実態調査の報告書について

本会ひょうごボランティアプラザでは、ボランティア活動を推進する団体の実態把握や、ボランティア活動への支援方策を検討する資料とするために、「第10回県民ボランティア活動実態調査」を実施。ボランティア元年から30年が経つ中で災害救援活動に関する項目や、コロナ禍前後の変化についても調査し、その結果を本年2月に公表しました。



実態調査

県経営協が「人材戦略最前線」報告書を発行

兵庫県社会福祉法人経営者協議会は、本年3月に報告書「人材戦略最前線」採用・育成・定着を前進させる私たちの人材戦略」を発行。報告書では人材戦略を「社会福祉法人の使命と目標の実現に向けて、人が集まり、それぞれが能力を発揮しながら活躍するための方法や体制づくり」とし、採用・

育成・定着の課題や取り組みの工夫を県内社会福祉法人に実施したアンケート調査から明らかにしました。また、人材戦略に組み込む8法人の事例を載せ、社会福祉法人の使命と役割を踏まえた人材戦略に資する考え方や取り組みのヒントを示しています。



人材戦略最前線

寄付寄贈のお礼

本年1月以降、GETCHA!様より、県内市町社協に車いす4台の寄贈を、(一社)親切会関西

支部様より、県内のセルフヘルプグループ3団体に寄付金を頂きました。ご報告と併せ、温かい善意に改めて御礼申し上げます。

県社協常務理事の交代について

本年4月、県社協常務理事の尾山健司が退任し、芳永和之(前ひょうごボランティアプラザ所長)が県社協常務理事に就任しました。任期は令和7年4月1日から令和7年度の定時評議員会の終結の時までとなります。

県社協職員異動・昇任

令和7年4月1日付

- | | |
|--------------------|--------------|
| ・企画部主事 | 清水 優香 |
| ・経理部主事 | 外川 貴啓 |
| ・同 主事 | 細井 清花 |
| ・福祉人材センター長 | 青木 健司 |
| ・福祉資金部主事 | 納庄 良輔 |
| ・権利擁護センター主事 | 照田 詩乃 |
| ・福祉人材研修センター所長 | 山内 喜夫 |
| ・同 研修推進部長 | 北川 聡 |
| ・同 研修推進部副部長 | 橋本 修一 |
| ・同 研修推進部副部長 | 北野 全彦 |
| ・ひょうごボランティアプラザ所長 | 柳瀬 長明 |
| ・同 事務局長兼総務調整部長 | 永田 育子 |
| ・同 交流支援部長 | 岡地 茂 |
| ・同 交流支援部副部長 | 赤松 克之 |
| ・ひょうご外国人介護実習支援センター | 実習支援部長 萱嶋 聖志 |

退職

令和7年3月31日付

- | | |
|--------------------|-------------|
| ・福祉人材センター長 | 椿野 泰三 |
| ・福祉人材研修センター所長 | 多留 幸子 |
| ・同 研修推進部長 | 花水 正夫 |
| ・ひょうごボランティアプラザ所長 | 芳永 和之 |
| ・同 事務局長兼総務調整部長 | 日原 基 |
| ・同 交流支援部長 | 高田 利江子 |
| ・ひょうご外国人介護実習支援センター | 実習支援部長 梶本 出 |

株式会社 あまの創健

健康管理・健康管理用品・環境衛生

- 医薬品・計量器具・健康増進器材の販売
- 栄養・運動等のコンサル業務
- 健康管理事業の企画、実施
- 工業薬品・脱臭剤の販売

家庭用常備薬品等の斡旋



女性のみの巡回型健診



AMANO GROUP

- 株式会社アマノ
●アマノドラッグチェーン他
- 天野エンザイム株式会社
●医薬用・食品・工業用酵素剤の製造販売
- 天野商事株式会社
●天野チェーン発売元



〒541-0059
大阪市中央区博労町二丁目6番7号
(東邦ビル9階)
TEL:06-6251-0990